

〈報告・記録〉

イギリスの労働者演劇運動機関誌 『レッドステージ』(1931-1932)

山 本 彩

Aya Yamamoto

東亜大学 芸術学部 アート・デザイン学科

e-mail: yamamoto-ay@toua-u.ac.jp

《要旨》

本稿は、演劇雑誌のレイアウトデザイン研究の一環として行った労働者階級図書館の所蔵資料調査の報告である。収蔵資料のうち、ワーカーズ・シアター・ムーブメントの機関誌『レッドステージ』を取り上げる。出版背景と概要、編集デザインについて、ピリオディカル・スタディーズおよびデザイン史の視点から記述を行う。

キーワード：イギリス演劇、労働運動、ワーカーズ・シアター・ムーブメント、演劇雑誌、エディトリアルデザイン

1. はじめに

演劇を通して労働者階級の解放を実現しようとした労働者演劇運動は、1917年のロシア革命以降1930年代にかけて隆盛を極めた。この運動は、国際的な交流が活発であったことが特徴である。1930年にモスクワで創設された国際労働者演劇同盟には、ソ連同盟諸国、チェコ、ドイツ、イギリス、アメリカ、フランス等の演劇団体が参加し、交流が行われた。日本からは日本プロレタリア演劇同盟（プロット。のちに日本プロレタリア演劇同盟に改称）が同同盟の日本支部として参加している。日本のプロレタリア演劇¹関係者はロシアやドイツのプロレタリア演劇を先進的とみなし、複数が留学や渡航をし、また、他国の演劇団体とも書面での交流を持った。

本稿では、イギリスのワーカーズ・シアター・ムーブメント (Workers' Theatre Movement, 以下、WTM) の機関誌『レッドステージ』(Red Stage: Organ of the Workers' Theatre, のちに New Red Stage に改題。

1931-1932) に着目し、編集デザインの特徴を分析する。WTMは労働者による演劇組織であり、ロシア革命や1926年のゼネラルストライキへの不満を背景に、権力を風刺するプロパガンダ演劇で1930年代前半のイギリス左派演劇を牽引した。WTMは国際労働者演劇同盟の活動に参加しており、プロットとも交流があったことがわかっている²。WTMの機関誌『レッドステージ』の発行期間は1年に満たず、第7号までと短命であったが、労働者演劇運動の手引きや交流のツールとして発行され、同時代の運動の発展の様子が克明に記録された貴重な資料である。

WTMを中心とした先行研究にはJones (1964) や Saville (1990) によるものがある。Stourac & McCreery (1986) は、ソヴィエト、ドイツの労働者演劇運動と並列してWTMの運動を分析している。ほかには、関係者の回想録が数多く残されており、Samuel et al. 編著の *Theatres of the Left 1880-1935: Workers' Theatre Movements in Britain and America* (1985) には WTM関係者のインタビュー、資料・戯曲の再録が掲載されている。

2. WTM の発展と機関誌出版の背景

本章では、WTM の主催トム・トマス (1902-1977) のインタビュー (Samuel et al. 1985, pp.77-98) を下敷きに、WTM の歴史と『レッドステージ』発行の経緯を概説する。

トマスは西ロンドンのバスケット職人の家に生まれ、14歳から証券会社で働きながら、夜間コースで演劇を学んだ。彼の最初の演劇公演は、1920年代半ばの労働党ハックニー支部の無料の交流会に集まった人々を楽しませるための一幕芝居であった。トマスは1926年に労働者による劇団ハックニー・レイバー・ドラマティック・グループを立ち上げる。同劇団は後にハックニー・ピープルズ・プレイヤーズに名称を変更した。1927年の時点で劇団員は20名ほどであった。創設当初は既存の戯曲を上演したが、評判が広まった後には、劇団外部から戯曲の提供を受けることもあった。トマスはロバート・トレッセルの小説 *The Ragged-Trousered Philanthropists* の舞台化翻案を執筆し、各地の労働者クラブでの公演は成功を収めた。

1928年に、ハックニー・ピープルズ・プレイヤーズは WTM に加入したものの、直後に WTM は活動を停止したため、ハックニー・ピープルズ・プレイヤーズが名称を引き継ぎ、トマスが WTM の主催に着任した。トマスが主催となる以前の初期 WTM は1926年から1928年まで上演記録がある団体で、中心メンバーには上位中産階級の文化人が所属していた。トマスらが引き継いだ第二期 WTM では、労働者階級の団員が中核を担った (Samuel et al. 1985, p.30, pp.50-52, p.97, Worley 2002, p.204)。

1931年以降、トマス率いる WTM はアジプロ演劇³に注力していく。ドイツ労働者演劇連盟 (Arbeiter-Theaterbund Deutschland, 以下、ATBD) との交流をきっかけに、WTM は1931年にドイツ・ライン地方でツアー公演を行った。その際に、音楽や歌を用いるドイツのアジプロ演劇⁴に感銘を受けたトマスは、帰国後に WTM でもアジプロ演劇を推奨した。こ

の演劇は、音楽を用いたレビュー形式で、劇場ではなく路上で行うものであった。短いスケッチにその土地特有の労働問題など関心事を盛り込むことで、劇団独自のレパートリーを構成できた。またその場に居合わせた観客の問い合わせに答えるなど、即興的演技も取り入れられた。トマスは、それ以前の伝統的な劇場形式での演劇では、観客は身内に限定され、劇場空間外へのメッセージの伝播に限界があることを問題視していた。これに対し、新しいアジプロ演劇は、小道具や舞台は必要なく機動性に優れ、街や工場など様々な場所で労働者に向けてメッセージを投げかけることができるようになった⁵。

これを機に、WTM は飛躍的に拡大する。創設当初、WTM はロンドンを本拠地とするおよそ一つの劇団であったが、イギリス各地で労働者演劇を上演する劇団が誕生したことで、WTM は全国の劇団を統括する立場をとるようになる。この時点で、ハックニー・ピープルズ・プレイヤーズはレッド・ラジオに名称を変更し、上演を継続していた (Samuel et al. 1985, p.90, Stourac and McCreery 1986, p.305)。トマスはロンドン近郊の劇団への指導を行ったが、各劇団への個人的な指導は現実的ではなくなっていった。新しい劇団からは、既存のスケッチの台本や歌に加え、新作の要望も寄せられるようになった。すでに WTM は各劇団向けのスケッチの台本の配布や、劇団を通して観衆向けの楽譜販売を行っていたが、1931年11月の機関誌『レッドステージ』創刊により、運動の拡大が本格的に推し進められた。

本誌は「各演劇団体の活動報告を出版し、新しいスケッチの台本、ブルジョワ演劇への批判を述べ、見解を表明する機能」を担い、編集は劇団レッド・プレイヤーズのチャーリー・マンが担当した (Samuel et al. 1985, p.91)。1932年のマー・デー公演では、『レッドステージ』と歌唱集が好調な売れ行きを記録した。

わかっている限りでは、のべ58の劇団が所属した WTM であるが (Stourac & McCreery 1986, pp.305-306)、1930年代半ばに急速に勢いを失う。1935年にナチズムとファシズムに

対抗する人民戦線が提唱され、共産党は「階級対階級」のスローガンを廃止した。このことで、階級社会の敵を風刺する WTM の演目内容が政治的意義とそぐわなくなった。また、この政治的転換によりヨーロッパ全土でアジプロ演劇運動が終焉を迎える。1935年にトマスは WTM の主催を辞任し、翌年に WTM は解散した。

3. 分析対象

本稿は、マンチェスターの労働者階級運動図書館 (Working Class Movement Library, 以下, WCML) 所蔵の『レッドステージ』を分析対象とする。本図書館は、労働者階級の歴史に関連する資料を収集しており、チラシ、雑誌、パンフレット等からなる演劇関連アーカイブに『レッドステージ』7冊および後続誌1冊 (*Workers Theatre Movement Monthly Bulletin*) が含まれている（表1）。

現存する『レッドステージ』は僅少であり、ウォーリック大学図書館のイギリス政治劇関連アーカイブに所蔵されているほか、大英図書館が少数部を収蔵している。

4. 『レッドステージ』の概要

本章では、Sholes & Wulfman のモダニズム

雑誌研究の手法 (2010, pp.143-167) に基づき、『レッドステージ』の概要を記述し、次章に編集デザイン上の特徴を述べる。

4.1 想定される読者像

主要な読者は、所属劇団の劇団員、公演の観客、劇団支援者、労働運動の支援者である。読者の裾野を広げるため、第4号ではウエストエンド演劇の批評、第5号では映画の批評を掲載した。複数の劇団が集会等への出演依頼広告を掲出していることからも、演劇人のみを対象とした内輪の発行物ではなく、労働運動に関心のある労働者全般向けであろうとした機関誌の姿勢が窺える。

4.2 部数・流通

発行部数は不明だが、号を重ねるごとに増加した様子である。第7号には3000部足らずと記載されている⁶。

『レッドステージ』は WTM に所属する各劇団を通して販売された。WTM はイギリス各地の劇団に希望部数を送付し、後日、売上金が WTM に納入された。第3号に掲載された「『レッドステージ』の販売拡大」の提言によれば、売り上げを伸ばすためには公演回数を増やすことが最も効果的であり、他の有用な2つの手段として、各劇団で劇団員が販売するノルマを設定するか、あるいは劇団ごとに『レッドステー

表1 WCML 所蔵『レッドステージ』の基本情報

タイトル	号	発行年月	価格	頁数	WCML 所蔵
The Red Stage	1	November, 1931	1ペンス	4	コピー版
Red Stage	2	January, 1932	1ペンス	8	コピー版
Red Stage	3	February, 1932	1ペンス	8	原本
Red Stage	4	March, 1932	1ペンス	8	原本
Red Stage	5	April-May, 1932	2ペンス	12	原本
New Red Stage	6	June-July, 1932	2ペンス	12	原本
New Red Stage	7	September, 1932	2ペンス	12	原本
Workers Theatre Movement Monthly Bulletin	3	February, 1933	1ペンス	22	コピー版

ジ』や楽譜の担当者を任命することが推奨されている⁷。

4.3 編集者と主な寄稿者

チャーリー・マンが創刊号から第7号まで編集者を務めた。労働組合運動の活動家として著名なトム・マンの息子で、ロンドンの劇団レッド・プレイヤーズの代表、演出および俳優として活躍した。『レッドステージ』の編集部からの論説、演劇の批評等の記事を執筆した。

『レッドステージ』は無記名の記事が多く、また署名記事は基本的にイニシャルのみ記載されているため、誌面のみからすべての寄稿者を特定するのは困難である。署名記事のうち、WTM主催者のトム・トマス(T. T.), 編集者のチャーリー・マン(C. B. M.), WTM書記でレッド・ラジオの劇団員であったフィリップ・プール(P. J. P.)の寄稿が最も多い。彼らWTMの中核を担った労働者階級出身の劇団員が中心となり、『レッドステージ』の編集や記事の執筆を行ったと思われる。

4.4 内容

各号は、複数の特集記事、WTMからの報告、各地劇団からの活動報告、楽譜で構成されている。スケッチのレビュー、スケッチの台本、ブルジョワ演劇および映画の批判記事、ソヴィエトの演劇報告、国際労働者演劇同盟関連の報告、活動指南、WTMからの要望等が掲載された。第5号から第7号までは映画批評が掲載され、徐々にスペースを拡大した。第6号と第7号にはWTM創設頃の歴史を振り返る記事が掲載された。台本では、スケッチ *Something for Nothing, Speed-Up Speed-Up* や、パロディー歌詞が掲載された。第2号から広告欄が掲載されるようになるが、本文に比べると比率は少なく、多くが劇団の広告である。

これら掲載記事の内容は大きく3つに分類できる。まずはWTMの理念の強調である。さまざまな提言や批評記事で、労働者の苦境を舞台化することの意義、演劇が階級闘争の武器であり、WTMの活動により大衆の啓蒙が可能であること、路上での演劇が効果的であるという

理念が繰り返し記述されている。次に、活動報告と指南である。WTMの理念を実現するための各劇団の活動報告や地方巡業報告には大きなスペースが割かれている。リハーサル内容や公演の予約、費用や売上など、具体的な活動方法についての指南記事も複数回掲載された。3つ目は、スケッチ台本、歌詞と楽譜、演目レパートリーのリスト等、上演素材の掲載である。スケッチのレビュー欄には、WTMが台本を所有するレパートリーを紹介し、あらすじや必要な俳優の人数などを記述した。ただし、個別の戯曲や演出に対する細やかな芸術研究的な記事は少ない。

4.5 仕様

創刊号は1枚の紙に両面印刷したものを折りたたんだだけの4ページ冊子であった。次号からは8~12ページの中綴じ冊子となる。サイズは206×266mm程度。創刊号と第2号は2段組で、次号より基本的に3段組で本文が組まれている。すべて黒一色刷り。印刷は、第5号まではAjax Press、改題以降はUtopia Pressが担当した。

後続誌『WTMブレティン』はより安価に複製できる形態へと移行した。組版を使用せず、表紙は手書き、本文はタイプライターで印字したもののが両面複写を束ね、左辺をステープラーで綴じた。

5.『レッドステージ』のデザイン

5.1 書体デザイン

『レッドステージ』創刊号は4ページのみで簡素なつくりであるうえ、デザインにもそれほど注力はされていない。題字は活字書体Windsorに人物のシルエットイラストレーションを添えたのみで、本文組にも特徴的なレイアウトはまだ見られない。次号からページ数が拡大し、編集デザインでもWTMらしさが表現されるようになっていった。

第2号から第5号では、オリジナルのロゴタイプが使用された(図1)。マストヘッドの左端には人物のイラストレーションが、右側には



図1 『レッドステージ』第3号表紙

誌名が記載され、背景に鎌と槍のシルエットが描かれた。帽子とオーバーオールを着用した男性はメガホンと旗を手に持ち、右上方向に向かって声を上げている。誌名「Red Stage」は文字同士が密着して右肩上がりにレイアウトされ、その右下に太いサンセリフ体で「Organ of the Workers' Theatre」と記載されている。人物の目線、メガホンの向き、題字の傾きは、左から右への動きを生み出し、全体で右上へ向かうベクトルを構成する。左から右へ、そして上から下へ文字が記載される西洋出版において、右上に向かうベクトルは、より発展的で理想的な方向への変化を示唆する (Kress & van Leeuwen 2021, pp.179-223)。本誌におけるマストヘッドのデザインは、イラストレーションと文字の組み合わせによって、高い理想を掲げる運動の発展を示唆するものといえよう。

題字の「Red Stage」は、RやAに顕著なようにコントラストのついた装飾的なサンセリフ体を模している。さらにその周囲を一本のラインで囲む装飾は、演劇の娯楽的側面を強調する。ボディの周囲をラインで囲む書体デザイン



図2 『レッドステージ』第7号表紙

は、同時期の上流階級向けファッション・ライフスタイル雑誌『タトラー』や、ウエストエンドの商業演劇を掲載する演劇写真雑誌『ザ・プレイ・ピクトリアル』の題字にも採用されており、アイキャッチとしての装飾性と、カジュアルな雰囲気を併せ持つ。

見出しの活字書体では、第2号以降本文記事のタイトルと段落頭で、インラインのある太いサンセリフ体が多用されている (図1)。第5号以降では、Broadway Engravedが見出しに多用されるようになる。その名通り煌びやかなエンターテインメントを連想するBroadway書体を元に、極太の縦のストロークに細いラインを追加したもので、インライン書体に近似のバリエーションである。また、『ニュー・レッド・ステージ』に改題以降は、題字にNeulandのインライン付き書体Neuland Inlineが採用された (図2)。インラインのあるディスプレイタイプは、軽やかさやカジュアルな雰囲気を持ち、一般的な新聞や、労働運動新聞には使用例が見あたらない。しかし、同時期の娯楽雑誌の誌面では、インラインのある書体の使用

は珍しいものではない。『タトラー』は見出しにインラインのあるセリフ体を、タブロイド要素の強いライフスタイル雑誌『バイスタンダー』は、題字にギザギザのインラインを描いたサンセリフ体を採用している。つまり、活字の選択においても、やはり『レッドステージ』は娯楽的要素を打ち出すデザインを採用しているのである。

『レッドステージ』の書体の選択において、ここまでに挙げた娯楽雑誌と異なるのは、貫してインパクトの強い、太めのサンセリフ体を多用している点である。同時代の娯楽雑誌の見出しでは、サンセリフ体よりもセリフ体が多く採用されているが、『レッドステージ』第1号から第5号までは、見出しの8割程度でサンセリフ体が採用されている⁸。また、第6号での改題以降の題字に使用されているドイツ生まれの書体Neulandは、現在では「アフリカっぽい雰囲気」を想起するものとしての大雑把な使用が浸透してしまっているが、1923年に制作された際には、ドイツのブラックレターをモダナイズするという意図があった(McNeil 2017, p.217)。1932年当時のイギリスにおいても、むしろドイツのイメージを持つ書体として認識されていたとみるべきだろう。

WTMの運動はロシアやドイツのプロレタリア演劇の動向に影響を受けた体制に反抗するモダニスト運動であることを鑑みれば、伝統的なセリフ体よりも前衛的なサンセリフ体を採用するのは自然な選択である。しかし、編集者のマンや印刷所の担当者に、ロシアアヴァンギャルドや構成主義等の力強いサンセリフ体等のイメージに追随しようとする明確な意図があったかは明らかではない⁹。

5.2 図像の使用

『レッドステージ』はテキスト中心の機関誌だが、第2号以降は1~3点の写真が掲載され、イラストレーションも度々掲載されている。これらの図像は議論の対象ではなく、テキストを視覚的に補助する機能と誌面を装飾する機能を担う。また、写真やイラストレーションの作者はクレジットされていない。

写真では、イギリス、ドイツ、ソヴィエトの演劇写真、ソヴィエト映画のスチルなどが掲載された。写真の撮影者や被写体の個人名は不明だが、キャプションや本文中で何を撮影したものかが明示されている。これらの写真はテキストと組み合わせて提示され、テキストで繰り返し述べられる理想の演劇の姿を可視化した。また、ソヴィエトの演劇や映画写真は、ソヴィエトの労働者を理想化した。

第7号の表紙は、『レッドステージ』誌面で写真が最も大きく扱われ、また唯一、写真が記事から独立して使用された例である(図2)。劇団レッド・フロントの公演写真が切り抜きで配され、中央の俳優は誌面の中央から右に一步踏み込んで、読者の視線を右方向のタイトルや目次情報へ誘導する。背景から俳優たちが切り抜かれることで、彼らは上演中の演目や役柄、日時や場所、舞台背景や観客から切り離され、雑誌タイトルや目次などのテキストを象徴するアイコンと化している。旗を持つ俳優は第5号までの表紙に描かれたイラストレーションに取って代わり、より大きく、より強い説得力を持ってWTMと『レッドステージ』を象徴する。

『レッドステージ』に掲載されたイラストレーションのうち、記事に添えられたものには、第4号表紙のブルジョワ演劇の風刺画が1点あるが、他はスケッチの挿絵が多い。資本家や労働者が描かれ、まれに人物のセリフが添えられている。本文でイラストレーションへの言及はされず、誌面を装飾する素材として使用されている。

またすべての号で、星マークが1~3箇所に使用された。黒で印刷されているものの、赤い星を示唆する記号として、赤が含まれる機関誌タイトルや、「レッド・ラジオ」、「レッド・フロント」など多くが赤を名称に含む劇団の活動報告欄の見出しに添えられている。

6. おわりに

WTMの演劇活動が組織化したことで機関誌が誕生した経緯は、ドイツのATBD、日本の全日本無産者芸術聯盟(ナップ)やプロット等

の同盟組織の機関誌出版の経緯と共通する。『レッドステージ』の体裁は他国の同盟機関誌と比較すると貧弱と言わざるを得ないが、この機関誌を通して、WTMの活動理念や手法がイギリス各地の劇団に共有され、また彼らの活動や理念が記録として後年まで残ることとなった。その編集デザインでは、テキストの内容に最も比重が置かれ、写真はその補助、イラスト

レーションはさらにその装飾として利用されたが、書体や写真の利用からは機関誌の性格づけや理念の視覚化の試みが見て取れた。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP24K15648の助成を受けたものである。

注

- 1 日本演劇史においては、1920年の労働争議を発端とした労働者劇団が労働者演劇運動の嚆矢であるが、特に、知識人や芸術家が牽引したマルクス主義芸術理論に自覺的な演劇活動をプロレタリア演劇と呼ぶ。日本プロレタリア芸術連盟と前衛座が発足した1926年から、東京左翼劇場とプロットが解散した1934年までを、日本でプロレタリア演劇運動がおこった期間とみなす（正木2016, pp.180-184）。
- 2 千田是也が編集を手がけたグラフ記事「世界プロレタリア演劇大観」（『中央公論』1932年6月号）には、『レッドステージ』とWTMの公演写真が掲載されている。また、『レッドステージ』の記事でも日本のプロレタリア演劇が言及されている。
- 3 アジテーション（扇動）とプロパガンダ（宣伝）を目的とした政治的な演劇で、劇場外で行われる移動演劇を指す。
- 4 ドイツにおけるアジプロの定義は、「労働者による独立した素人演劇隊を指」し、ロシア革命以降のロシア演劇が先駆けであった。ドイツのアジプロ演劇はドイツ共産党の後押しを受け、日本のプロレタリア演劇運動にも大きな影響を与えた（ウォンデ2007, pp.3-4）。
- 5 この頃のWTMの出し物の中心は風刺であり、攻撃対象は、新聞、独立労働党、労働党、保守党であった。1930年初頭の段階で、WTMは共産党の様々なイベント活動に組み込まれるようになった。1931年の選挙では、共産党立候補者の応援のためスコット

ランドと一部イングランドでツアーパー公演を行った（Samuel et al. 1985, pp.45-46, pp.90-93, Worley 2002, p.207）。

- 6 C. B. M. (1932) "Our Paper," *Red Stage*, No.7, September 1932, p.3
- 7 "Pushing sales of "Red Stage"" (1932) *Red Stage*, No.3, February 1932, p.5
- 8 第1号では見出しが全てサンセリフ体であったが、第2号から第5号では76～81%程度にサンセリフ体を使用している。
- 9 第6号で、本文の見出しがセリフ体の使用が増加したが、第7号では再び見出しがサンセリフ体の使用が増加している。第6号以降の印刷所の変更によって使用可能な書体が変わった可能性もある。

参考文献

- Jones, L. (1964) *The British Workers' Theatre, 1917-1935*. Unpublished PhD thesis. Karl-Marx Universität.
- Kress, G. and van Leeuwen, T. (2021) *Reading Images: The Grammar of Visual Design*. 3rd ed. Routledge, London
- McNeil, P. (2017) *The Visual History of Type*. Laurence King, London
- Samuel, R., MacColl, E. and Cosgrove, S. (1985) *Theatres of the Left 1880-1935: Workers' Theatre Movements in Britain and America*. Routledge & Kegan Paul, London.
- Saville, I. (1990) *Ideas, Forms and Development in the British Workers' Theatre, 1925-1935*. Unpublished PhD

- thesis. City University London.
- Sholes, R. and Wulfman, C. (2010) *Modernism in the Magazines: An Introduction*. Yale University Press, New Haven
- Stourac, R. and McCreery, K. (1986) *Theatre as a Weapon: Workers' Theatre in the Soviet Union, Germany and Britain, 1917-1934*. Routledge & Kegan Paul, London
- Worley, M. (2002) *Class against Class: The Communist Party in Britain between the Wars*. I. B. Tauris, London.
- ペアーテ・ヴォンデ (2007) 「アジプロの身体と声」萩原健訳, 萩原健編『集団の声, 集団の身体: 1920・30年代の日本とドイツにおけるアジプロ演劇』早稲田大学坪内博士演劇博物館. pp.3-5.
- 正木善勝 (2016) 「共有領域としてのプロレタリア演劇」神山彰編『交差する歌舞伎と新劇』森話社. pp.179-202.

A Magazine for British Workers' Theatre Movement: *Red Stage* (1931–1932)

Aya Yamamoto

University East Asia, Faculty of Art, Department of Art and Design

e-mail: yamamoto-ay@toua-u.ac.jp

Abstract

This article focuses on *Red Stage* (1931–1932), the paper published by the Workers' Theatre Movement, which led the workers' movement through drama in mid-war Britain. After summarising the organisation and the paper's history, this article describes its design features from the perspective of periodical studies and design history based on the copies archived at the Working Class Movement Library in Manchester. The research conducted at WCML is part of the author's ongoing research project on theatrical magazines and their layouts. This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP24K15648.

Keywords: British Theatre, Working Class Movement, Workers' Theatre Movement,
Theatre Magazine, Editorial Design